■ 総合文化研究所年報　第28号（2020）pp.41－63

人間の近代的貧窮についての メトロポリス・ルポルタージュ

――ディケンズ、松原岩五郎、ダーウィンのミミズ

辻　吉祥

《要約》

社会的弱者は社会的弱者であるがゆえに、まず、社会の認識の俎上にのぼせることが困難である。ひとびとは、名を与えられず（いやむしろ気ままに付けかえられ）、存在を搾取されているが、かつその存在の事実を認証されないのである。19世紀ロンドンのジャーナリストから出発した文学者Ｃ・ディケンズは、スラム街への社会的認識を構築するために、あらゆる言語的修辞による抗争を組織していた。それは真のディアレクティークという意味で、すぐれた社会性を実現しており、同時代のＦ・エンゲルスのルポを凌ぐ本質的に社会的なものである。主体の内在的真理を引き出そうとする――しかも関係の外部に立つことなしに――この社会性は、思想史上極めてすぐれたたたかいであると見做し得る。また、近代的貧困者の認識には、もう一つの陥穽がある。生産力がなければ人間でないという陥穽である。それは、まずしいはたらく者たちへの階級の区分としても機能していた。しかし、大量生産、大量消費のみを追求し、自然への還元・分解を同様に行なわない生産力主義はいびつであり、自然への還元の作業を担う者たちへの歴史的な差別、無価値化、排除に対しても通底するものである。ダーウィンは、肥沃土をリデュースによってプロデュースするミミズに着目したが、その価値転換は、自然の回復可能性を考慮しない資本制の破壊性を見直し、生産性から見るのとは異なる、自然の側につく社会的弱者を大事に考えてゆく、これまでにない社会性を構築するためにも、重要な観点なのである。

キーワード：チャールズ・ディケンズ　松原岩五郎　下層社会　自然への還元　ルポルタージュ

糞や吐瀉物をむさぼる亡者の傍に
一人しゃがんでいる痩身の男が見える
貌をさげふくれた自分の腹を覗いている〔……〕
餓鬼道を通って革命の道へ　餓鬼道を通って反革命の道へ……

飢えたる者とは飢えに憑かれた者であることは生活の過程そのものが忘れさせてくれない。飢えとは決定的に胃袋の問題であり、だが絶体に胃袋の問題だけであることはできない[1)]

一　はじめに ── 新救貧法のもとでのジェイコブ島

事実の確証が、かほどさように容易ならば、世話はない。フィクションの言葉と機構にかかわる者はつねにそう考えてきたはずである。例えばE・H・カーの論述のように、その歴史観が洗練されればされるほど、われわれにはどうにも縁遠いものになる。とりわけ、事態が、ついに人間の「困窮」に関わる場合、その筆は、かえって直截性を回避し、正鵠を失わざるを得ない。例えば仮にその苦難、場の臭気について、人はいったいいかなる資格があって描出可能なのか。その酷薄さには、運筆を放棄させる力が、むしろそうすべきであるという倫理が、まず第一義的に前提される。迂回し、ふたたび舞い戻っては、中空をなぞり、揺動する。文字に刻むに憚り、書きあぐね、言いよどみ、だが、おそらくそこにはじめて、社会的なよどみが、背中向きに、翳（かす）みのなかに見え隠れする。わずかながら、そこににんげんが現れる。にんげんが描く対象がまたにんげんに他ならないということは、ついにそういうことである。

こうした意味で、われわれの生活を根底で規制する資本制の「近代」と、それが産み出す貧窮をとらえはじめることができたのは、むしろ直截性に隔てた、転位を軸とする言語機構、フィクションの言語であった、というべきなのかもしれない。

一八三八年、ロンドン、テムズ河の南岸・バーモンジーに位置するジェイコブ島（Jacob's Island）[2)]の見かねたありさまは、まず次のように示された。いや、そこにいたりつくまでに、まず、次のような場所を、通過せねばならないという。

〔……〕込み入って狭い、泥濘の迷い路を踏みながら、水辺に棲む、落ちぶれ果てた貧しい人混みに揉まれて、盛んに必要な物売りがなされているらしいところを通る。軒々に値崩れしてどうにも不味いような食糧が積み上げられ、見栄えのしない、粗末な衣服が、扉に、家の低い壁や窓に、引っ掛けて売ってある。どん底のあぶれた者たち、底荷（バラスト）積みの人夫、石炭運びの人夫、恥を厭わぬ女、ぼろを引っ掛けた子供、それにテムズ河からあがった塵芥、廃物すらも押しのけながらやっとの思いですすんでいくと、耐え難い視界、むっとする悪臭に襲われる、その先に、狭い路地が左右に枝分かれしている。ガタガタうるさすぎて耳をも聾するのは、どこの角にもあるらしい倉庫という倉庫から山と運び出された商売品を積んだ重い荷車の騒音。ようやくにして、奥まった、それまでと違って人気（ひとけ）の少ないはずれ路に出られたかと思うと、よたよた歩道にかぶるように突き出ている軒並みを掻いくぐらねばならないし、人が前を通るだけで崩れてきそうなボロ壁、半分崩れて、もういっそ倒壊しようかと悩んでい

るらしい煙突、時の流れと汚れでぼろぼろに錆びついた鉄の格子に守られた窓、さらには、想像しうるかぎりの、打ち棄てられ、荒寥そのものを示しているかのようなあらゆる光景を、くぐり歩いていかねばならない。

このような場所、サザーク区のドックヘッドの鼻先に、「ジェイコブの島」がある……〔以下略〕

チャールズ・ディケンズ『オリヴァー・トゥイスト、あるいは教区生まれのこどもの生い立ち』(一八三八年十一月初版)第三巻、第十二章(第四八章／全章)[3]

快活と飄逸さによって江湖を愉しませ、作家的地位を確かにした最初の長編小説『ピックウィック・クラブ遺文録』に続いて版を重ねていたこの小説における陋巷の描写を追いかけて、ようやくにして、というべきか、十年ものちになってディケンズの入れ違いの同僚、ヘンリー・メイヒューが、『モーニング・クロニクル』(*The Morning Chronicle*, 1769-1862)紙(一八四九年九月二四日月曜日号第四面)に、「バーモンジーのコレラ汚染地区を行く」という着任第一信(の匿名)記事を寄せることになる。

遺棄された貧困と疫病の結合した風景(「メトロポリスの膨大な汚物、腐敗物が、疫病やペストのおぞましき巣窟」)が一九世紀以来の基軸的な社会問題であったことをも同時に思い起こさせるこの記事が、それでも、ジェイコブ島への遅ればせの早期レポートになったというわけである。そして、言うまでもなく、この記事がさらにチャールズ・キングズリー『オールトン・ロック』(一八五〇年)をはじめとして、これに続くギャスケル、サッカレーらのロンドンのスラム[4]に関するフィクションに引き継がれ、かのルポルタージュの影響は確実に歴史的に揺曳していく。

この同時代性を想起するためにさらに補助線を引いておくならば、F・エンゲルスが、北部のマンチェスターに滞在し、(ロンドン、リヴァプールをも含めた――産業構造はじつはいずれもまったく異なっている)労働者の実態調査をはじめたのが、一八四二年十一月末以降四四年八月までの二十一カ月間であり、それは、二四歳の最初の著『イングランドにおける労働者階級の状態』(四五年六月ライプツィヒ版、八七年四月ニューヨーク版、九二年三月ロンドン版)における「社会的殺人」という把握に結実してゆく。

また数次ある改定のうち、僅かばかりの女性の労働時間制限(一日十二時間、週六九時間)が初めて盛り込まれたのが四四年の工場法であった。この時期の都市における貧困の状況について、エンゲルスはこう述べている。

マルサスが「有り余りの者」という名のもとに、貧困、いや精確には失業を、犯罪となし、社会は餓死をもってそれを罰するべきであると言明していることはすでにみた。救貧法委員たちはさすがにそこまで残忍ではなかった。食わずに死ね、というのは、救貧法委員たちにとってさえあまりにひどすぎるものだった。「よろしい。」と彼らは言う。「では君たち貧乏人に存在する権利は与えよう。ただし、存在するという

だけだ。君たちが自分たちの数を生み増やす権利はない、人間らしく存在する権利も与えない。君たちは国の厄介ものであり、国の他の災厄とはちがってにわかに駆除できないのだとしても、君たちはみずからがこうした国の禍いであり、少なくとも数を抑制されるべきであり、〔子を産んで〕直接に、もしくは他の人を怠惰と失業に誘うことで、これ以上「さらなる余りもの」をつくってはならない、と感じるべきである。生きてもよい、しかし、余計者になろうかなどという考えを起こすすべての者に対する、いましめの例として生きよ」。

こうして、彼らは新救貧法を提出した。これが一八三四年に議会で可決され、現在に至るまで効力を保っている。　（傍点は原文イタリック。〔　〕内は引用者。）

「プロレタリアートに対するブルジョワジーの態度」[5)]

この救貧法改悪以降の状況が、さきの『オリヴァー・トゥイスト』におけるディケンズの絶対的な批判対象にして前提の社会状況であることは、まさによく知られるとおりである。のみならず、ひろくは現在にいたるまでの、こうした社会および言説の規定性が、近代の資本制下でにんげんがつぶれ、つぶされていく場の原基的なありかたを示しているのだとも思われる。

とはいえ、本論は、こうした事例によってこの資本の世界的中枢部のスラムについてなされた記述の歴史を、そのまま時系列になぞろうとするものではない。それらの記述がむしろ成立しがたい、事実をめぐる圧倒的な不可視化――無視、物理的な視野に入っていながら見ていないことにするという不思議さ（ディケンズなら端的に “amazing” と形容したであろう）も含めて――のプロセスについて、その力学を、ジャーナリズムおよび文学の言語の「書かれたこと」「書かれること」の構成のうちに追尋しようとするものである。

二　『オリヴァー・トゥイスト』、スラムにおける殺人、もしくはスラムという抹消

じっさい、このヴィクトリア朝を第一に代表することになる作家――レズリー・スティーヴンの卑近きわまりない低評価にもかかわらず――による、この記憶に刻印せずにはおかない下層社会の記述、この近代資本制下の極度の階級両極分解という最重要の「事実」でさえ、可能な限り、事実そのものの否認、存在それじたいへの否認の力が、強くはたらき続けてきた経緯は、想起されておかなくてはならないことだと思われる。書かれることそれ自体だけでは、社会的認証を得ることにはならず、社会的「事実」は、つねに政治的な力学の裁定の中にしか着床を認可されない。

知られるように、ディケンズは、死の二年余り前、著者自身が最終的に改訂の手を入れた六七年ディケンズ版の、この一孤児の悲喜交々の帰趨をめぐる物語の序文に、しかもその結語においてはっきりと、次のように記していたことを再認識しておかねばならない。

一八五〇年、ロンドンの驚嘆すべき市参事会員が、ジェイコブ島なぞ存在しない、存在したためしもない、と高らかに公言したのである。〔だが〕ジェイコブ島はこの一八六七年にいたるまで（発育不良と同じような場として）ずっと存在し続けている、〔五〇年代以降徐々にスラム・クリアランスによる―引用者注〕「改良」なる手が入り、姿を変えてきたのだとしても。

「著者による序文（一八六七年版）」（『オリヴァー・トゥイスト』）[6]

この議員は、他ならぬかつてロンドン市長でもあったピーター・ローリー卿（1778–1861）を指しているが、このロンドン連合銀行の会長、治安判事をも兼ねた男は、長きにわたってどのようにもこのディケンズの下層社会の実情についての告発を、認めようとはしなかったのである。

こうしてみるならば、つまり物語が埋め込まれている社会的な文脈をおさえておくならば、従来言われているような、『オリヴァー・トゥイスト』物語の前半と後半における、メロドラマ性とピカレスク小説風のセンセーショナルな展開の異質な結合とは、おそらく結構上の分裂したありかたではない。むしろ三四年の改定新救貧法による、貧民労役所（workhouse）の改悪以降、はっきりと打ち出されてきた、人間を成員の外部へと追い立て、排除するレッセ・フェール型の社会のありかた[7]と、その影響下に成立している端的な具体的な生活の場であるスラムとを、全体化して了知すべき社会問題として大きく結合させたものだと言えよう。

オリヴァーの苦難に関わって、ナンシーを殺害、逃亡をはかった悪漢、ビル・サイクスの逃走の跡を追いかける読者は（先に引用した章のタイトルは文字通り「追跡と逃亡」である）、図らずも、あるいは否応なく、自分では決して認めることの無い一人の孤児の寂寥のさらに向こう側にある問題、人間の貧困が具体的に日々営まれている空間、つまりスラムの社会に――サイクスの罪を追及する限り――みずから分け入っていかざるを得ないのである。言い換えるならば、オリヴァーを懸命に庇護する　よき心の持ち主、ナンシーの殺害にいきり立つ群衆〔≒読者〕は同時に、その追及の行為自体によって、「人間のもつ優しさを決定的に欠いた」（「第三版によせた著者の序文（一八四一）」）[8]かに思われる冷徹な殺人者に対する、自ら自身の義憤の内容に出会うのである。どんなに弱い立場の者であっても、いやそうであればあるだけ、その者に対する理不尽な暴力、殺人を（なによりその場面を目撃した以上は）許すわけにいかないという衝迫は、そのままみずからの義憤の「社会性」を問われる場、あるいはそれ以前に孤児に同情を寄せているならば、その孤児を孤児たらしめた社会的状況というものに連接して視野が深まってゆくだろう場所、すなわち最下層のスラムの状況に、立会せざるを得ないのである。罪を追いかけ、深追いしたその先で、日常的には「その名さえまったく耳にすることが無く」、「汚濁に満ち、特異な地域」[9]であるジェイコブ島に、直面するのである。J・ヒリス・ミラーなら「迷宮」と言ったその先に――またG・オーウェルの指摘したように、ディケンズは小説を違えて

たびたび種々のスラム描写を繰り返すのだが――スラムの酷薄な情景が厳然として広がっている。

> 五、六軒が一緒くたになって使っている裏手の木の階上通路はどうにもまともではない、足もとにあいた穴の下からは泥濘がのぞいている。窓は、破れ、つぎがあてられ、そこから物干し代わりの棒も突き出ていたが、洗濯物のかかった試しもない。部屋の中は狭く、不潔、窮屈と言ったらなく、むせかえるような空気は〔先のヘンリー・メイヒューのレポートによれば硫化水素が多量に噴出していたという―引用者注〕、もとよりここに転がり込むような汚らしい、みすぼらしい人間にとってさえも、害がおよびそうなほどであった。木造でたてかけた住まいのいくつかは泥の掘割りに張り出して、落ちかかっている――いやすでに落っこちているところもある。垢まみれの壁、腐りかかった土台。貧乏と言えばこれという、吐き気のするような醜悪なありさま。あらゆる嫌でたまらないもの、不潔、腐敗、廃物。これらをすっかりさらけだして、このフォリー・ディッチ（アホどぶ）の両岸を飾り立てていたのである。
>
> ジェイコブ島に入ると、倉庫らしきものには天井がなく、中には何も無い。壁は崩落し、窓はもはや窓ではなく扉は路に落ちている。……〔以下略〕[10]

文学テクストの結構上、この仕組みの目的の優れた点は明らかである。この言語空間の構成を、かつてのロシア・フォルマリスト、とりわけボリス・M. エイヘンバウムの顰に倣って言い換えておくならば、殺人の罪をおかした逃亡犯の落ち延びた先であるスラム社会は、殺人の結果、目前に現れるのではない。むしろ警察もその地図に不案内であるような場、スラムとの否応ない直面のために、殺人は、もっとも群衆（≒読者）の義憤を誘う形で、惨たらしく、善行（に目覚め、立ち直ろうとしたばかり）の、しかも女性相手に敢行されるのである――耳について離れぬようなあの撲殺の音を脳裏に刻まれたまま――。そして読者は頁を進めざるを得ない。読者の義憤は、足のある認識によって、スラムの無視／実在の認識を試されている。

加えて物語の力学上確認されておくべきは、じっさい、殺人を犯したこのビル・サイクスの罪は、追いかける群衆の要求するカタルシス（浄化）を満たすようには償われないということである。サイクスはみずからの罪意識による亡霊（ナンシーの眼）に付きまとわれ、屋根の上で足を踏み外し、ついに社会的な制裁を受けることなく物語から退場するのである。物語構成上の拮抗関係はこれで尽きている。サイクスの物語上の意味は、よって、悪はそれなりの報いを受ける、ではなく、スラムの場を社会的な認知に連れ出すこと、にほかならない。それを果たしたのち、サイクスはみずから転落するのである。しかし、すでに物質的に転落していたサイクスに、さらなる物理的な転落は残されていなかったともいえるのだが。

いのちを殺めるのが罪、ならばここに見る、悪環境にのたうつ人間たちの光景は――い

のちを危険にさらす個人の殴打が罪であるなら、では、エンゲルスの言う、死の必然が予想され、それを承知の上で命を縮めさせてゆく「社会的な」殺人は――緩慢とはいえ同じ殺人の現場ではないのか。“Nobody’s Fault”（だれもわるくない）（『リトル・ドリット』原案の題）、直接に見えていなければよい、という態度はただそのままに認容されてよいのか――。

この光景を見よ、ここがジェイコブ島だ、その浅薄なる義憤の真正性、この現実に跳び込んで試されてみよ、というわけである。

現実の執拗なまでの無視に対しては、認識の構築が対置されているのである。

＊

前後させたが、ちなみに、『イングランドの労働者階級の状態』の著者は、ここで述べた社会的殺人という言葉について、詳しくこう叙述している。

> ある個人が他の人の身体を傷つけ、しかもそれが死にいたるような危害であったなら、それをわれわれは傷害致死という。加害者が事前にその危害が致命的になることを知っていれば、その行為をわれわれは殺人と呼ぶ。ならば社会が、何百人ものプロレタリアを、あまりにも早すぎる不自然な死、剣や銃弾によるのと同じように暴力で強いられる死に、必然的に陥らざるを得ないような立場においているのならば、何千人もの人々から必要な生活条件を奪い、生きえないような状況に置いているのならば、法という強腕によって、避け難く死に通じてゆく条件にがんじがらめにしているのならば、何千もの人々がそうした境遇の犠牲となり果てるに違いないことを知りすぎるほど知っており、それでもそうした条件を存続させ続けているのであれば――それは個人の行為と同じように殺人である。ただそれとわからぬ偽装された悪辣な殺人で、だれも身を守ることができず、殺人には見えない殺人、というだけのことである。殺人犯は姿を見せることはなく、皆が殺人犯でありながら誰も殺人犯ではなく、犠牲となった死が自然死のように見え、そしてこの殺人の罪状は何かをしたことではなく、何もしなかったこと、という次第だ。しかし、それでも殺人は殺人にちがいない。イングランドでは、社会が社会的殺人――イングランドの労働者新聞が正当にもそう呼んだ――を毎日、毎時間ごとに犯しており、労働者を健康が続かず、長くは生きられない状態においているということ、労動者の生命を少しずつ、徐々に削り取り、そして、あまりに早々に墓場へと連れていくのだということを、わたしはいまや証明してみせよう。のみならず、社会は、こうした状態が労働者の健康と生命にとってどれほど有害であるかを知っており、それでもその改善のためには何もしないのだということも証明してみせよう。社会がみずからの制度の結果を承知しており、したがってその社会の行為が、たんなる傷害致死ではなく殺人だということも、官製文書、議会報告、政府報告を事実の典拠として引用してしまいさえすれば、すっかり証明できたことになるのである。
>
> 「諸結果」[11)]

三　小説はフィクションであるというトートロジーとイロニーによる鏡、社会性

では、こうした世界認識を迫る結構に対してさえどのようにも感化されにくい認識、事実の遮蔽というのは、どのような心的、社会的態度からもたらされるのか――「そんなことは知りたくない。そんなことは議論したくもない、そんなことは認めるものか」とゆるんだ口から言い放つボドスナップのように（『われらが共通の友』）。社会的な諸結果に対するあまりに卑小な非社会的マインド。ただの感情の懶惰、無関心、固陋という精神的セッティングはどのように構築されるのか。

とはいえ、おそらくそれはむしろ、いわゆる悪意、難じる側の者から期待されるような積極性、意図ある隠蔽に基づいてはいないように思われるのである。ここで精査されなくてはいけないと考えるのは、そこに認められる、たんなる無知、認識の不足ということではない。むしろ常識的、いや低劣な、文学の言語に対する誤認もまた十全に機能させられている、ということなのである。事実を取り扱うには事実の言語というものがあり、小説はあくまで空想裡に描かれたものだ、というあまりにも通俗的に広まりすぎた単純極まりない認識である。

かのピーター・ロウリー卿は、「どうかスープをもう一杯ください」の場面に市民権を得た『オリヴァー・トゥイスト』以降のスラム街認識においてさえ、依然次のように述べている。それに対するディケンズの抗争、先の序文に遡る、一八五〇年の廉価版に付された文面を仔細に検認してみたい。[12)]

> 〔スラムの改善が、費用を抑えながら現実的に可能だという議論の後、では、「ジェイコブ島がどちらにあるか、教区委員会の皆さんにご説明いただけますか」と訊かれて。―引用者注〕
> 「それがわたしのなんとも主張したかったことなのです。〔スラムの環境改善が可能だと議論する〕ロンドン司教は、貧弱で単純な心もちから、そんな酷いところが実在するかのように、あれこれこまごまと主張なさいましたが、それは、かのチャールズ・ディケンズという小説家が十年も前にお話の中で描いたものでして、空想の中にしかないものなのでございます（爆笑）」。

これが反論になっているという意識や思考形式にかかずらうべきかどうかはともかく、とはいえ、これに対して執られたディケンズの峻烈な言語的闘争はきわめて明快なものである。

> わたしは〔『オブザーヴァー』紙に載った〕これを読んで、たいへん驚きました、その「誠意」、「真実」性、論理の「賢明さ」といい〔……〕、それで、こう決心したのです、ここに事実を記録しようと。数千人の人びとに向かって、きちんと知ってもら

えるように、そして大事に考えてもらえるように、と。

〔……〕このようなことを考えるにつけ、私はこの「序文」をピーター・ロウリー卿への私からのささやかな称賛の証しにしたくなったのです。しかし、わたしは、苦しい考えに苛まれました。でも、こうしてよく考えてみると、ロウリー卿さん自身は存在しないことになるのだろうか……（かつてわたしは、ロウリーさんを判事長として、クリスマスのためのある小説に書いてしまったことがある）。〔ディケンズは一八四四年、「クリスマス・キャロル」の一年後に「鐘の音」という小説を書き、そこでロウリー卿のパロディとして、キュート・オルダーマン参事会員兼治安判事を登場させている―引用者注〕――だって小説に書かれていることは「存在しない」って言うんだから、それならロウリーさんも、いやそんなひと、ぜったい、存在しないというわけですものね！

ディケンズは、ここでどのレベルの言語的抗争を仕掛けているのか、もはや明らかであろう。小説は単なるフィクションである、というどうにもならない（ではそれが何ゆえ歴史的に存在してきたのかを考えもしない）俗論、素朴にしておめでたい（小説やそのメッセージが社会性や歴史の外部に存在するとでも思っているかのような）無感覚さ、われのみ良かれわれ関知せずの無関係性の柵作りに対して、ディケンズは、ディケンズの論理によってではなく、ほかならぬロウリー卿自身の論理によって、認識上の痛覚をつくりだしているのである――あなたのその論理を敷衍すると……わたしが小説に書いたことで、あなたは実在しない人になってしまうのだね！ というわけである。

社会を見るに自己からはじめ、自己にしか収束しない自己認識を崩壊に追い込むこと。他者性、社会性の欠如、に対して、社会的諸関係の総体性、アプリオリ性を認識に導くこと、そしてそれを決してみずからが外部に立つのではなく――これがきわめて重要なのだが――（当人の）内側からの論理によって、導出すること。すなわち、ディケンズもまた「神」ではなく「ひとびと」のひとりにすぎない――。社会的存在としての「われわれ」に外部はない、そのひとりとして、「社会への認識」を引き出してゆく。小説に書かれていることは「実在しない」、というおそろしく浅はかな社会的言語の認識を崩壊させるべく、彼らじしんの論理のダブル・バインド、自己矛盾に追い込んでいくのである。

おそらく、「鐘の音」を読んでもいないロウリー卿は、その内容をさっそく確かめなければならなくなるだろう、良く描かれていれば存在を認め、悪く描かれていれば、存在を認めない、あるいはそのようなご都合主義もまた、自らの滑稽な姿のうちに自己崩壊せざるをえないだろう。たかがフィクション、しかしそのフィクションに対する自身の戯画的な姿を自らイメージすることなく、身動きすることは不可能だろう。小説世界と現実との言語的合わせ鏡の中に放り込まれることで、ロウリー卿はロウリー卿自身を批評的に見つめざるを得なくなる。論理の自己崩壊に自ら気付かざるを得なくなり、ロウリーはついには〈社会的な鏡〉を、みずから手に入れるようになるのである。社会的な自己批判が、ロ

ウリー卿のなかに産み出される。

ここにジャック・デリダの脱構築の議論を差し挟む必要はすでにないはずであり、むしろ、ソクラテスの産婆術、カール・マルクスが『ライン新聞』のジャーナリストとして以来、ながく愛用したイロニーによる論理破産の手法、というべきかもしれない。安易、安逸に付き、愚劣と物事に真摯に取り組まない懶惰と無責任（それはほかならぬ彼らが下層民に押し付けていた表象！）と横柄さに踏ん反り返る非社会性に満ちた権力の、自己崩壊――。

これは、正義をかざした形而上学的な批判とは対極のありかたである。真理を社会性の外部にかざして迫るそれではない。社会性は社会性の中でしかそのよき道を設営することはできない、その厳しさのなかにある変革の言語である。言い換えれば、外部性をつくらない思考。どんなに劣悪な思考の者であっても、切り捨て、もしくはその対極の超越性（＝真理はわたしが持っている）に拠る態度を形成せず、同じ人間である当事者の内在性に賭け続ける――どこまでいっても同じ人間だという認識の中で、みずからの解体もうちに含みながら、その人間の内在的にして社会的な認識の開けに賭ける――ディアレクティーク（わたしはこの語で正-反-合なるフィヒテ由来の図式をまったく想定していない。むしろM・バフチンの描いた対話性、社会的な転覆を創出する認識・交通形態のことを指している）に主体とその言語を賭けているのである。なんぴとも当人以外、真理の主人になり替わることはできないのだから。

ディケンズは何ゆえ大衆作家の道を選んだか、何ゆえ『ピックウィック・ペーパーズ』のあとに反転した『オリヴァー・トゥイスト』を配置したか。『クリスマス・キャロル』のあとの『鐘の音』。メロドラマのあとのピカレスク。すべての手順は明瞭かつ整合的に理解できる。

こうして超越的な立場を失効させたディケンズは、最後に続けて次のように記している。

> そうでなかったとしても、私は、ロウリー卿がここに引く文章に同意してくださるに違いないと確信するものです。私の友人シドニー・スミス師〔(1771-1845）―引用者注〕が三〇年も前に書いたもので、最近彼を亡くしたばかりなのですが、彼はたいへんウィットに富み、愚か者たちは怖れ慄いていました。このたびの事案にも至極該当すると思われます。
>
> 「懸案についてわれわれはいろいろと言ってきたが、判断を示そうと思う。豪遊好きの者たちは、自分にはできない慈善行為が他の人によって為されると、それが馬鹿げた非現実的なことに見えるようにしたいという理由で、慈善行為を嘲笑しようとばかりしている。これよりもさらに堕落の度が深い者は、汚濁、貧困、知識が得られないことに伴う人間の悲惨な状況に対しての共感というものがことごとく欠落している。所得税をあてて慈善を捻出すること、困窮者の惨めな姿と汚れまじりの涙についてな

んとかできないかと考えることを、冗談と嘲りの格好の餌にする。このような根深い、吐き気のするような反道徳が、今日なお存在すると思いたくなかったのだが、しかし——否応なくわれわれはそう認識せざるをえないのである。」

デヴォンシャー・テラスにて　一八五〇年三月

こうして、ディケンズは、社会的な貧困の認識をどのようにも回避し続けようする階級、資本と政治の代表者に、事実に直面するよう、認識の機構を組み立てていくのである。認識のエンクロージャーは破砕され、またここに、社会的な言語に対する非社会的な言語観、事実とその認識の有無についてや、事実の言語と虚構の言語の区分可能性などという素朴さに依存した言語観はない。事実の介添え役には、つねにフィクションがアドヴォケートしており、事実は、単純な対象と概念の一致からはじまるのではなく、フィクションによって、認識の仕組みによって、むしろあたらしく生みだされる緊要性がここに認識されている。

事実に出遭うための認識の構成がフィクションと呼ばれるならば、フィクションはすぐれた事実認識への産婆術、ディアレクティークというべきだろうか。すくなくとも「事実」にいたる最初の認識の一撃は、そうして歴史上、つねに切り拓かれてきたのだと思われる。

じっさい、同じ社会性の問題を問い、このような人間の人間外への放逐の仕組みを「事実」の集積によって批判的につきつめながら、一方でエンゲルスのルポルタージュは、しかし、先の書誌に記したように、半世紀近くもの間、米国、英国版いずれも四十年以上の時を迂回させられている。英語圏では、この「事実」認識をクロノロジカルに構成せず、半世紀後、「昔話」に位置づけることができたということである。ドイツの出版社ヴィーガントと著者の個人的関係だけでない、英国との協定の問題も含めてなぜイングランドの人間が、自国の「労働者階級の状態」への認識から、半世紀近くも離間させられ続けたのかという政治性が考えられねばならないが、むしろ重要なのは、思想の文体、文体の思想ということで言えば、エンゲルスの筆致には、おそらく、他者へ認識を迫る攻撃はあるが、自らを省みる〈社会的な鏡〉を相手に巧みに手にとらせるその技術はない。リフレクションを成立、介在させる「社会性」と、個人のたんなる集合性として捉えられる社会性とは思想史的な水準で言えば、多大の開きがある。G・バーナード・ショーが『リトル・ドリット』のインパクトを『資本論』に比したのとは異なる意味で、「人間を社会的に捉える」その言語的達成においてエンゲルスは、ディケンズやマルクスに水を開けられている。

このようにして小説の機構は、それを「認めないもの」との抗争、イデオロギー環境の中で、はじめて歴史的な言語装置であることの意味を明らかにしてゆくのである。

＊

だが、にもかかわらずこうして設営され続ける認識の遮断のうちに、メトロポリスの盛装のイヴェントは、執行された。つねにそれを支えた人々の困苦を押し隠しつつ笑顔を贖った。目と鼻の先のハイドパークでは、一八五一年、ロンドン万国博覧会が世界のメト

ロポリスとしてのプロパガンダをこともなく、成功させているのは知られる通りである。

とはいえ、この間、ディケンズの切り拓いた地平は徐々に広がりを見せてゆく。E・ギャスケル、G・ギッシングはむろん、ヘンリー・メイヒュー『ロンドンの労働とロンドンの貧民』（第一巻・第二巻、一八五一－五二年）がまず結実を見てゆく。また、ジョン・ホリングズヘッドの『一八六一年のボロっくそロンドン』（六一年）、ジェイムズ・グリーンウッド『救貧院の一夜』（六六年）、『ロンドンの七つの呪い』（六九年）、『ロンドンの荒れ野』（七四年）、『下層生活の深み』（七六年）、ジョージ・シムズ『貧しき人々の生活』（八三年）、『悲惨なるロンドン』（八九年）、アンドリュー・マーンズ『見捨てられたロンドンの痛切な声』（八三年）、ウォルター・ベザント『ギベオンの子ら』（八六年）、マーガレット・ハークネス『キャプテン・ローブ（のち改題、最暗黒のロンドンで）』（八九年）、アーサー・モリスン『路地の物語』（九四年）、これらのうちのいくつかはベストセラーともなり、社会民主同盟による一八八五年からの調査は、チャールズ・ブースの『ロンドンの人々の生活と労働』全一七巻（八九－一九〇三年）に結実してゆく。次に関説する、日本でも知られる救世軍のウィリアム・ブース『最暗黒のイングランドとその脱出口』（九〇年）はこうした流れの最後尾に位置した一著作であったにすぎない。

四　スラムのルンペン、ではなく物資の欠乏した場所に住むひとりびとりの方へ

さて、この資本制の社会をそのまま「近代」とみて懐疑なき――第二回目の六二年ロンドン万博では、日本列島各地の文化風俗の品が、遅れた地域のオリエンタリズムの一環として見世物に供された。にもかかわらず――模倣にすすんだ日本語圏では、その後『クリスマス・キャロル』、『荒涼館』、『リトル・ドリット』などでも続いたディケンズのスラム街認識をめぐる、真剣で激しい対抗関係を理解するには至らず、（同時代の英国文壇の一部の評価をそのまま真に受けたような）愉快気な大衆作家と軽くみて受け流すか、[13]そうでなければむしろ、ディケンズの影響力を最小限に見積もろうとするリットン・ストレイチーをはじめとしたブルームズベリー・グループの批評の流れに無自覚に同一化していたようにも思われる。

日本の近代文学史は、出発してまもなく、鷗外の〈啓蒙的視座〉に、漱石の代表的な〈高等遊民〉なる存在に、尾崎紅葉の西鶴回帰の〈趣向〉に、その主流の役割を預けていくことになるが、おそらくはいずれも一九世紀後半以降に顕著になりはじめた階級の両極分解の問題に対して、本質的な社会的感応性が（むろん波及の時期はずれるにせよ）著しく低かった。むしろ海外の社会的な認識に敏感だったのは、これまでも指摘されているように、「近代」小説の試みを中絶させた二葉亭四迷、文学史のなかに未知への痕跡をたどろうとすれば、そのようになる。もとより、『浮雲』は、一八八五（明治一八）年の大行政整理による失職者の群れを背景としてもっている。中心人物・内海文三は免職官吏であり、意中の者を官僚制に出世する本田昇にうばわれている。この一作品の挫折、中絶が、これま

でも文学史上たびたび議論の的になるのは、それが、失われつつありえたもう一つの方向性を大きく指し示しているからである。

二葉亭は、一八八九（明治二二）年の八月から官報局の職についたが、これも伝記的によく知られているように、英露を中心とした紙誌の翻訳の業務に伴い、海外の時事的動向にこれまで以上に知識を深めていく。そしてそれと連動するようにして、日本の貧民窟の状況に対する、松原岩五郎、横山源之助らとの、調査、探訪の連帯の意識ができあがっていくのであった。

その重要な一部をわずかながらここに確認しておくならば、この点での最初期の代表的な著作『最暗黒の東京』（初出『国民新聞』一八九二年十一月十一日～九三年八月二三日断続連載）における松原岩五郎がとらえた貧民窟への視角はまず以下のようなものである。「生活は実に神聖なり、貧は実に壮重の事実なり。苟(いやしく)も人間生活上の事実とあらば、其れが鹿鳴館の仮装舞踏会(フハンシー・ボール)と貧民社会の庖厨(だいどこ)騒ぎとに軽重のあるべき筈なし」（（五）住居及び家具）。「利益は上に壟断されて下層に金銭の流液するなく、賃銀廉、稼業閑、労働者は既に絶躰して将に絶命に陥入らんとす。」（「（十一）生活の戦争、下層の噴火線（三）」）。

「錦と飾られたる裏の雑巾的紋様」（「（六）日雇周旋」単行本）と、メトロポリスに貼り合わせの貧富格差をみごとな対比に比喩した「最暗黒の東京」のなかに、松原が潜入にあたって最初に得た「活計の事」の場、四谷の残飯屋は「家は傾斜して殆んど転覆せんとするばかりなるを突かい棒もて是を支へ、軒は古く朽て屋根一面に蘚苔(こけ)を生し、庇(ひさし)檐は腐れて疎らに抜けたるところより出入する人々の襟に土塊(つちくれ)の落ちんかを殆(あや)ぶむほどの家」と描かれる状態であった。縮減された人間の基礎条件にイングランドの下層との彼我の差は認められない。

ここに始まる松原のルポについて、これまでしばしば言及された論に前田愛「暗喩としてのスラム――松原岩五郎の『最暗黒の東京』」（「思想の科学」一九七九年九月号）がある。[14]そこで前田は、『最暗黒の東京』冒頭（初出は「其一　探検者の人相」）の「談、偶ま龍動府(ロンドン)の乞丐(こつじき)に及ぶ。彼等が左手に黒麺包(くろぱん)を攫みて食ひつゝ右手に空拳を握ツて富豪を倒さんとするの気色は、如何に世界の奇観なるよ。英の同盟罷工、仏の共産党、乃至孛露(プロ)の社会党、虚無党、其事件の起る所以を索ぬれば、必らず其處に甚だしき生活の暗黒なかるべからず」を引きつつ、「イギリス労働者のストライキやヨーロッパ各地の社会主義運動を、「生活の暗黒」に引きよせて理解しようとしていた松原の限界」と述べている。あるいはまた「素朴な発想」ともしている。そこから、日本における貧民窟ルポの創成に対してその意義を論じるのではなく、記号論的に置き換えて処理しようとした前田には、何が顧慮されていただろうか。

論に明示的には述べられていないが、民権運動の流行歌「欣舞節(きんぶぶし)」との相似以上に重要な位置を占めてここにあるのは、従来貧困層を捉えるにあたってあたえられていた認識の枠組みの問題である。それを一言で言うならば、松原岩五郎の描いた階級は「ルンペン・プロレタリアート」であり、その後に横山源之助が『日本之下層社会』（一八九九年）に

おいて「社会科学的」にとらえるようになった貧困層はその一部に「プロレタリアート」を含むようになったという図式である。

社会問題の把握に際し、それを救貧、思想化する側に理論上の区分けがあり、その解決の主体が析出できるものとそうでないものの暗黙のフィルターがあるのである。そして、松原のとらえた貧困層には、近代プロレタリアートはまだ析出できないというわけである。前田のみならず、多くの貧民窟ルポに対する評価を暗黙のうちに規定しているそれは、言うまでもなくK・マルクスの資本制批判の主体に関するセオリーである。むろんこれを踏まえない階級分析は困難でかつ問題含みであろう。人格と切り離した労働「力」――ヘーゲルの『法哲学』を下敷きに踏まえている――を賃金に換える者、それだけが、その代償ゆえに社会変革への権利を有しており、そのほかは、それに下属するという論理が、これまでの人格、人間そのものを売買した奴隷制とは異なる「近代的な労働者」（の困難）のありかたを切り分け、その人権（革命への権利）を規定しえた重要な思想であることはすでに明確であり、動かし難い。

よってこの切り分けは思想に同じる側で長く維持され、例えばのちの最も代表的なプロレタリア文学者のひとり、中野重治の説伏によれば、以下のようになる。ルンペンとは、「働こうという意志がな」く、「あらゆる生産からまつたくはなれてのらくらしている」存在である。政治的に「買収されやす」く、「一ぱい飲まされてストライキ破りを」する。ゆえに「上べで似かよつてるからといつて、ルンペンと失業労働者とをごつちやにする考えにたいしては戦わねばならぬ」。「ルンペンと失業労働者とを混同して、労働者・農民が何らかの意味でルンペンに頼るものであるかのような幻想や、ルンペンが労働者・農民の世界を建設するために積極的に戦う一つの階級であるかのような幻想を知らず知らずふりまくことに反対する」[15)]。

こうした裁断は、困窮のうちにあるひとりびとりを一括りにし、嫌悪感と忌避感を投影させ、さらには近代労働者を（社会変革に対する）理論的に正しい態度に仕立て、硬化させるのに成功している。軽侮、軽蔑されるべき貧民の設定が、変革主体を差異化し、その自負を担保する構造になっている。しかし、いま改めて依拠された原典に付くことによってはっきりするのは、マルクス自身の述べる通り、人びとは「あらゆる階級からもれ落ちたくず〔Auswurf〕、ごみ〔Abfall〕、かす〔Abhub〕」としてのカテゴリーの残余の集合にすぎず、彼ら「ルンペン（襤褸）」とされた存在になんら一貫した社会＝経済的な通約内容がない、すなわち社会階級たりえないということなのである。

> 疑わしい生計の手段をもち、素性の明らかでない落ちぶれた放蕩者、ぐれて遊蕩しているブルジョワジーの跡取りのほかに、浮浪者、兵隊くずれ、釈放された懲役囚、ガレー船を脱走した奴隷、ペテン師、大道芸人、ナポリの賤民（ラッツァローニ）、すり、手品師、賭博打ち、ひも、娼宿経営者、荷担ぎ人夫、日雇い人夫〔第二版・三文文士〕、手回しオルガン弾き、くず拾い、刃物研ぎ、鋳掛け屋、物乞い、要するに、ていをなさず、バラ

バラで、ほうぼうに抛(なげう)たれた群衆の一団、フランスでは la bohème(ラ・ボエーム) と呼ばれている連中〔……〕。

『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』（一八五二年初版）第五章[16]

じっさいに、この『ブリュメール18日』は、エンゲルスがのちに階級関係の単純化を法則視しようとしたような思考形式には全くそぐわない、むしろそれを裏切るような同時代の現状分析としてあり、階級闘争を通じた社会的代表が単純化されえないこと、むしろその陥穽の力学によって、ボナパルティスムという奇怪な政治的寄生体が成立することを論じたものである。ジェフリー・メールマンはそれを階級闘争の基軸性とその代表制に対する「スキャンダル」と呼んだが、むしろそれは、マルクスのつねに具体的状況に即して理論構築をおこなう思想性が明確になった書ということでもあった。[17]

近代プロレタリアートもまた、歴史の中の動態的な闘争概念である以上、絶対的ではありえず、その設定の仕方次第では、貧困の苦痛に晒され、辛苦とともに生きている人びとの実にさまざまな実態の把握をし損なう目線をつくり、さらにはその実態を覆うレッテルを機能させる場合があるということである。カテゴリーはときに、そこにいる人間それぞれを見つめることができなくなる括りつけ、ということになりかねない――「わたしもこの子どもたちも、健康ってどんなものか知らない、でも、どうしろって言うの。誰だってパンのあるところで生きていくしかないんだからね。この家も貸そうと、張り紙したけれど、借り手はつかなかった」（前出、H・メイヒュー『モーニング・クロニクル』）――生死にまでかかわる人間性の葛藤と相克、パンか革命か、餓死か反革命か、の選択を迫る酷薄な問題設定やそれを問う権利主体への存疑は、エピグラフに示した詩人・黒田喜夫の苦難の思索をあらためて想起させる。そしてわたしたちの課題に戻るならば、貧困の社会的な発見を、食欲の「幻想の領域に境を接する豊饒さ」なる記号論的な隠喩の体系に乗せた前田の論の暗礁に、こうした「ルンペン」を評価しないとする枠組み、そして本来的にはマルクス自身における貧困をめぐるスキーマの問い直しという問題が横たわっていたはずなのである。

＊

そして、今日では、あたらしい――文字通りあたらしい――見解を切り開くために言を試みておかねばならないことだと思われるが、これらの貧困への視角は、対象を明らかに不可視化しており、個々の貧しさに困苦する人間の諸相をとらえることをできなくさせてしまっている。少なくとも例えば、ヘンリー・メイヒューが、下層社会の人びとを分類総覧したような地点にまで遡って、可能ならば近代的な革命に賭する規定をいったん外し、生活を生き延びる人間の社会的生態について再注視する、認識の枠組みをつくりだしてみる必要があるのではないだろうか。

『ロンドンの労働とロンドンの貧民』の中でメイヒューは（彼もまた「救済に値しない者」という分類を設けていることに変わりはないが）、街頭に出ている貧民を “street-folk”

と呼び、それを〈街頭の物売り〉、〈廃物回収〉、〈拾い屋〉、〈大道芸人〉、〈街頭の職人〉、〈街頭の労務者〉の六つに分類している。松原岩五郎、そしてのちの横山源之助も同様に、資本制下の工場労働者にいたらない、たいへん多くの生業のひとびとを描き出している。これを「未分化」[18]と呼ぶことに上記のように十分な根拠があるのではあるが、その未分化なままの生きる姿を、それぞれの困難のかたちに合わせた視座、および現在的な社会問題を解決する視点から、再考してみることもまた可能なのではないかと思われる。

五　『資本論』以降のマルクスから、ダーウィンのミミズへ

近年、マルクスにおける自然環境と資本の収奪性の問題構制について考究する立場から、草稿、抜粋ノートを所謂 MEGA 版全集に拠って精査している斎藤幸平は、「資本」の関心の所在について、専ら「〔労働力のみならず〕自然力についてもその持続可能性などは考慮せずに、自らの価値増殖にとっての手段としてのみ接する。その限りで、労働力の疲弊と同様、人間と自然の物質代謝の亀裂という矛盾が現れてくる」とみずからのメタボリズムという観点からの読解を整理している。そのうえで、「自然力の再生のために必要とされる費用に対しても〔資本の支払い対象となる〕抽象的人間労働が対象化されていないために、支払いが行われ」ず、「自然的属性」の論理が取り残される、と指摘する。[19]

これは、マルクスの数少ない公刊された記述からその論拠を探すならば、

> 資本制の生産様式は、〔……〕人間と大地との間の物質の代謝を壊乱する、すなわち、人間によって食料や衣服のかたちにされて消費された土壌成分の大地への回復過程を、ひいては土地が持続的に肥沃度を保つという自然に備わる永久的な条件を、壊乱するのである。
>
> 『資本論』〔第二版〕第一巻、第一三章「機械設備と大工業」第十節「大工業と農業」[20]

と述べていることに該当する。だが、マルクスの未完のエコロジー思想――E・ヘッケルが一八六六年に“Ökologie”という造語を鋳出し広がりを得る以前は、この物質代謝〔Stoffwechsel〕という用語が同様の内容を指示していた――を草稿ノートの精査によって跡付ける斎藤の優れた探究によっても、自然資源が適切に「制御」されるべきとするマルクスの未完の思想体系の帰結は示唆されるが、ついにその自然への回復過程の（社会的な）価値化、およびその新たな主体のあり方の導出には至っていないように思われる。

土壌成分の回復については、文学史ではのちの宮澤賢治の取り組みについても当然想起され、思想史的に検討する別の機会を得たいが、ここでわたしは、もう一人の近代性についての主軸（マスター・セオリー）となる思想を創ったC・ダーウィンの原典に想を借りたい。ダーウィンは誰もが知るはずのその主著の最終部分で、いささか唐突にではあったが以下のように明記していたはずなのである。

数知れぬさまざまな種からなる植物に覆われ、灌木には鳥たちが囀り、昆虫たちが思いもよらないような動きをしている、そして、じめっとした土のなかをミミズたちが這い、くぐり抜けている、そんな多様性に満ちた土手を、じっと見つめて考え、これらの精妙につくり込まれた存在が、一つとして同じものがなく、それでいてお互いに関わり合いを保っているその複雑な在り方、これらの存在がたどってきた、いまも作用しているさまざまな摂理のはたらきを考えるのは、じつに興味深い。これらの決定要因は、広く、世代を重ねる中での発達、遺伝〔……以下略〕

『種の起源』（一八五九年初版、第十四章「要約と結論」）[21]

初版（一八五九年十一月）から第六版（七二年二月）にいたるまで、極めて多くの補筆・修訂がなされたこの書のなかでほぼ変更のなかったこの最終箇所の多様性の描写において、その自然界の再生産性、再豊饒化がミミズという存在に代表されて示されている点は、まさに興味深い。ダーウィンは『オリヴァー・トゥイスト』の出版された二八歳の時から、死の前年一八八一年十月に『ミミズの作用による肥沃土の形成及びその習性の観察』を出版するまで、この地質学的な力の作用主（アクター）について長く考え続けたのであった。

マルクスの晩年の未完の体系、闡明され尽さずに終わった自然の再豊饒化の問題の切れ端・余白に、このダーウィンの最後の著書、『種の起源』以前から四〇年余りにもわたって継続されたミミズの研究を接続してみること、進化――ダーウィンはこの語をこの書で使用していない。正確には生物の分岐過程――の永続性の傍らに、ミミズが顔を出現させるこの結論部の最終場面の意味を深く、重く捉え直してみること、これによって、わたしたちの「近代性」が置き去りにし、等閑視してきた認識の空白が焙り出されてくるのではないかと思われる。大量生産、大量消費、相応の自然還元ならぬ大量廃棄のいびつな体制、自然・人間からの収奪を専らとする生産中心の世界観が空白、匿名、無意味、無価値にしてきた壮大な思量の空白領域、均衡を考慮した自然の回復過程を組み込んだ、人間とその環界についての未思考の領域を、露わにするはずなのである。

文字通り、前に - 引き出す〔pro-duce〕ばかりではない、自然への回復過程への参与をおこなう〔re-duce〕の担い手、主体の、無名化・匿名化ではない、明視化と社会的な価値化、尊厳の回復は、単なる呼号や道徳的配慮の水準としてではない、あくまで理論的な、このような近代の主軸理論に対する構造的な読み直し、認識の刷新によってその端緒が開かれるのではないかと思われる。

こうした観点をいま仮に視座として据えてみるならば、これまで生産性がないとされ、低価値化された非生産的労働の担い手としての人びととその労働が、松原をはじめとした明治期の数々のルポルタージュから、きわめて生き生きとしたかたちで立ちあがってくるように思われるのである。

例えば、以下のように。

屑拾ひの輩が拾ひ得る屑の種類は素より枚挙に遑あらざるべし今其重なるものを分記すれば左の如くならん

紙屑は

日本紙の白、反古、色紙、塵紙、浅草紙、油紙、油染の類

西洋紙の白、上、並、上包紙、油染、ボールの類

更に之を細別すれば其種類又数十に分ち得べし何れも改良半紙、地柾、塵紙、浅草紙、鼠半紙、西洋紙等の原料として問屋の手を経て各製造所に引き取らるゝものと知るべし

襤褸は

本縮緬類、唐縮緬類、甲斐絹類、絹藍襤褸、絹雑巾襤褸、木綿継屑、木綿藍襤褸、紺足袋、白足袋、手拭、男褌（通称ドシ）女褌（女ドシ）、緋金巾、腹掛、股引、手甲、製糸襤褸、雑巾襤褸、絹毛織屑、羅紗屑、ネル屑、スコツチ、セル、毛布、靴下、手袋、真綿、木綿綿、肥料屑

以上は大略に過ぎず、さてその一種類毎に上中下及び屑物の四種以上に区別し、先づ生けの儘に用ひ得べきものを上等とし以下其種類に従つて夫々の使ひ途あり最下等の屑物は之れを肥料に使用するものと知るべし爰に其重もなるものに就き使用法の一斑を説明すべし

先づ唐縮緬は之をモスリン会社に持行きてモスリンの原料となし本縮緬は髪掛け又細工物に使用し藍絹は藍蠟屋に於て之を煮て藍を取る又甲斐絹類は継切れとならざる分は鍛冶屋に於て磨き鉄の艶出しに用ひ或は雑巾に用ふるものあり木綿継切れは之れを大中小に区別して其大小に依り夫々継切れに用ふ、藍襤褸も亦藍蠟屋に於て正紺の藍を絞取り其粕は或は肥料に使用する事もあるべし　〔傍点―引用者、以下同〕

「紙屑拾ひ」（東京の貧民六）『時事新報』一八九六年十一月二九日（無署名）

ここでは敢えてその存在の広範性を示すために、松原、横山以外の報告より引用したが、さらに継続されるこの詳細な分類過程から、これだけの分解労働を、広い意味での地球的規模での自然力への還元作業の一部として見做さない、あるいは評価しないという「近代的」な価値観、すなわち生産、自然から「引き出す」ということにのみ価値を見い出してきた世界観とその価値づけによる序列は、充分再考されるに値することが看取できるのではないか。

この匿名の記者は言う。「凡そ何の屑にても以上の使用に当らざるものは肥料の原料に供せらるゝを以て如何なる不潔の物、又は微細の物といへども一たび屑拾ひの手にかゝるものは腐を転じて新となし死を転じて生となすを得べし。屑拾ひは是れ廃物の為めに亦一種の救世主なるかな」と。

こうして、どのルポルタージュにも記されていながら、等閑視されていた自然への還元作業を担う人びととその労働[22]に対して、少なくとも「物質代謝の破壊をとどめ、自然力

の回復に寄与する人びと」という価値化の視角をもつことが、明治期の相当数の下層社会ルポの中で、そのなかに近代プロレタリアートの萌芽形態を切り出し、その他を雑多な貧困者として、本来まなざすべきであった貧困という状況概念からも文字通り「捨てて」しまうような思考方法よりも、今日的で重要なアプローチになるのである。そしてあるいは、その労働の担い手を、ジョン・ベラミー・フォスターとは異なる意味で、自然の豊饒化に寄与しながら無視されてきた存在、環境プロレタリアートと呼んでもいいのかもしれない。あるいはそれが、『資本論』第一巻発刊以降の未明のマルクスの思考にかなう人間把握でもあるだろう。

じっさい、ドイツ語で屑を意味する“Lumpen”のカテゴリーは経済的範疇でもなく、まさにカテゴリー自体にとってのただの残滓、デリダならば、階級概念の転覆の梃子とでも言ったに違いない——残余の集合項目なのである。

こうした観点によってはじめて光があてられる人びとは、これまで、生産性一辺倒の「人間」観のなかで、向き合われることなく、不可視化され、それどころか貶められてきた。そしてここには、生産性にそぐわない（わたしたちが大切にしているレジリエンスの高い）人びと、もしくは意識して背を向けてきたひとりびとりがふくまれていたはずであり、これらの存在を見直し、発掘し、歴史的に正当に位置づけ直していくことは、これから極めて重要になってくる。そして、いうまでもなく、自然力の回復を顧慮しない資本制はすでに生物全体の存在基盤自体をすでに手遅れであるほどに大きく切り崩している。

人間が自然界の力と労働力から引き出して（produce）、造り出したものを、自然に還帰・回復していきやすいように分解（reduce）していくひとりびとり。自然の豊饒化に資するはたらき、分解・還元をこそ価値として生きる存在。

新たな視点の導入によって、自然力の回復に寄与した者だけが、社会＝自然的環境総体の変革に関して主体性と権利を主張できる、そのようにも把握し直せるかもしれない。

＊

こうしてみると、生産物への始末——文字通りに始まりと終わりのサイクルという思想的な言葉である——の付け方、その分解・還元のプロセスへの、無理解、軽視、無価値化、こうした近代のこれまでは見咎められなかったような傾向性こそが、わたしたちが再生産しつづけている社会的差別の底流をなす価値観、文化、眼差しと一体であり、それに即した処遇を強いてきたことがわかる。プロデューサーであるとともに自然へのリデューサーであることへの展望、これは、自然へのわれわれの態度の深刻な分裂の克服にひとえに懸かっており、21世紀的な喫緊の主体形成への、未踏の道筋なのだと思われる。

社会観にだれもその外部にはいない、という観点をもつこと、地球や社会性の内側に恣意的な外部を想定する思考の無効性を知ること、生産性の軛から解除され、還元する労働への価値付与を行なうこと、これらは、マイノリティーという不断の残滓をつくろうとする無限の反復から、逸脱を組織するもうひとつの重要な、そしておそらくは急がれる、認識の道なのである。

むろんこれは、ふたたびこの自然への還元労働を、みずからのものとせず、外部化、とは他者に委譲、預けわたししようとする、意識の第三世界差別主義を許すものではない。どこかに追いやってしまえばよい外部、それはもはやいささかも存在していないのである。

注

1）黒田喜夫「死にいたる飢餓――あんにや考」『死にいたる飢餓』（国文社、一九六五年六月）所収。

2）なお、ここの “Island” はむろん比喩でもあって、その事情は以下と相同である。「南北二町半、東西二町余の新網町の一廓を称し「島」と云ふは此地の習ひなるが、彼の吉原洲崎（よしはらすさき）の遊廓を称して「島」と称（とな）ふるが如く此の地の風俗習慣全く市中と異なり自然と大陸を離れたる孤島の有様なるより此称あるものならん。」無署名「昨今の貧民窟（十六）（芝新網町の探査）歳の暮れ」（『報知新聞』一八九七（明治三〇）年十二月五日、一面）。

3）Charles Dickens, *Oliver Twist; or, The Parish Boy's Progress*. By “Boz”, ed. Philip Horne, (1838; London: Penguin Books, 2003), pp.416-417.

4）なお、“slum” は一九世紀初頭は住居空間の意味であったが、徐々に何かしら悪いことの行なわれる場、不良住宅などの隠語に転じた。今日の「貧民窟」「貧民街」の意味を担いはじめるのはこの時、つまり一八四〇年代である。

5）Friedrich Engels, *Die Lage der arbeitenden Klasse in England : Nach eigner Anschauung und authentischen Quellen* (Leipzig: Otto Wigand, 1845), S.341. *The Condition of the Working-Class in England*, trans. Florence Kelly-Wischnewetzky, in *Karl Marx Frederick Engels Collected Works,* Volume 4 (1892; Moscow: Progress Publishers, 1975) p.572.

6）Charles Dickens, “Author's Preface (1867),” in *Oliver Twist,* (London : David Campbell, Everyman's library, 1992), p.xlvi.

7）救貧法改定の歴史的経過とその福祉政策の観点からの意味については例えば、大沢真理『イギリス社会政策史』（東京大学出版会、一九八六年五月）が詳細に整理し、ウェッブ夫妻（ベアトリスはC・ブースのスラム調査員の一人でもあった）の被救済（relief）権をめぐる従前の理解を批正するに及んでいる。

8）前掲（注3）所収, Charles Dickens, “The Author's Introduction to the Third Edition (1841),” p.460.

9）前掲（注3), p.416.

10）前掲（注3), pp.417-418. なお、この未踏のスラム、ジェイコブ島について最初に日本語訳がなされたのは馬場孤蝶訳『オリヴァー・ツウィスト（世界大衆文學全集　第九巻)』(「四十二、廃屋の捕り物」)（改造社、一九三〇年一月）であった。先行の社会主義者、堺利彦による翻訳（全訳に近い翻案）はわずかに「谷中天王寺の塔の中に泥棒の一群が潜んで居た。」(「小櫻新八（百一)」細香生（堺枯川）訳「都新聞」一九一一年四月二九日）で済まされている。堺はこの問題に反応できず、孤児悲話というレベルで処理していることがわかる。また、この問題に焦点化した数少ない研究には、John R. Reed, “Dickens on Jacob's Island and the Functions of Literary Descriptions,” *Narrative*, vol. 7, no. 1 (Jan., 1999), pp.22-36, がある。「リアリズム」の構成について、イデオロギー環境以外の文学的機能に

ついての考察がなされている。

11）前掲（注5）, S.120-121, pp.393-394.

12）前掲（注3）所収 , Charles Dickens, “Preface to the Cheap Edition（1850）,” pp.461-464. こうしたスラム住民の立場に立脚した序文を庶民の手に取りやすい廉価版に記す点ももちろん意識的であったと思われる。なお、この時期、ディケンズは貧民の住居、衛生環境の改善に向けて活動を集中させており、この序文（未邦訳）はそのひとつにすぎない。『マーティン・チャズルウィット』の廉価版序文（一八四九年十一月）、『荒涼館』（一八五二－五三）でのスラム（トム・オール・アローンズ）記述、さらにはつぎの前年発足の首都圏衛生協会におけるディケンズによる晩餐会演説記録（1850年2月6日、1851年5月10日）も参照。“Metropolitan Sanitary Association, 6th Feb. 1850,” “Speech of Charles Dickens, Delivered at Gore House, Kensington, 10th May 1851,” in *The Speeches of Charles Dickens*, ed. K. J. Fielding（Oxford: Clarendon Press, 1960）, pp.104-110, pp.127-132.

13）よってたとえば漱石がディケンズに関して述べた知見は、同時代の英書を典拠にした場合、同時代の平均的な了解にとどまっており、その点、直接（翻訳に及ぶほど）小説に親しんだ逍遥、魯庵、秋声などの見解に見るべき点がある。また影響史に関して言うならば、内田魯庵の翻訳した（二葉亭四迷にも助力を得ている）『罪と罰』をはじめ、ドストエフスキー、トルストイの作品の淵源のひとつには彼らが好んで読んだディケンズの影響がはっきりと痕跡を留めているのであり、直接的な言及、材源調査を行なっている限り、さらに向こうにあるインダイレクトなディケンズの多大な影響は見えてこないと思われる。

14）なお、松原岩五郎の研究については、はやく柳田泉、山田博光の仕事をはじめ相応の蓄積がある。近年も内藤貴夫「松原岩五郎『最暗黒の東京』における材源研究――Henry Morton Stanley, In Darkest Africa の影響を中心に」『比較文化研究』（二〇一五年二月）にいたるまで、前田の指摘を跡付けた同時代の雑誌や本との照合研究がある。しかし、こうした財源研究に納得ができないのは、極限された印刷物どうしの一対一対応だけを実証とする分析手法であり、残りの99％以上の言説内容についてはなんら証明できないことである。松原の記述には、それだけに収まりきらない多様な言説が錯綜して（奇妙な観相学的記述なども）織り込まれているが、それら社会的言説の転用関係については放置される。かつて前田は本のタイトルだけで影響関係を推考したようだが、事実は「最暗黒の英国」どころか、“darkest London” という言葉自体、一八八〇年代以前から「イースト・エンド」に替えて誰もが口にする（conventional !）符牒として流通していたのであって、識字階級や刊本に限定された特殊な用語などではない。同時代言説の位相が未調査にされているか、たんに読み違えているのだと思われる。

15）中野重治「ルンペンのこと」『戦旗』（一九三一年六・七月合併号）。

16）Karl Marx, *Der* 18. *Brumaire des Louis Bonaparte*, In: *Karl Marx Friedrich Engels Gesamtausgabe*（*MEGA)*, Abt. Ⅰ , Bd.11（Berlin: Dietz Verlag, 1985）, S.141-142. 加えて、第二版（一八六九年）に基づく以下も参照した。“The Eighteenth Brumaire of Louis Bonaparte,” in *Surveys from Exile,* Political Writings Volume 2, ed. David Fernbach, trans. Ben Fowkes（Harmondsworth: Penguin Books, 1973）, p. 197.

17）この点については、植村邦彦「マルクスにおける歴史認識の方法――『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』をめぐって」『関西大学経済論集』（第四七巻第五号、一九九七年十二月）、が、J・メールマン、ドミニク・ラカプラの見解を批判的に取り入れ、さらに西川

長夫のボナパルティズムを再考した議論をも総合し、図式性を峻拒しつつ状況に向き合って理論を構築したマルクスの思考について跡付けている。また横張誠も、『フランスにおける階級闘争』で金融貴族が「上層」のルンペン・プロレタリアートと記述されていることに触れ、これが階級概念たり得ないことを想起させている。加えてこれにマルクスがロマ族の人びとを想定していたということであり、ならば一層このカテゴリー化による侮蔑は、断じて成立しない。『芸術と策謀のパリ――ナポレオン三世時代の怪しい男たち』（講談社、一九九九年二月）第三章、第五章を参照。

18）横山源之助の『日本の下層社会』についても、「貧民や職人または労働者を、未分化のまま『下層社会』としてとらえていた」との評言がみえる。鹿野政直『近代社会と格闘した思想家たち』（岩波書店、二〇〇五年九月）七二頁。

19）斎藤幸平『大洪水の前に――マルクスと惑星の物質代謝』（堀之内出版、二〇一九年四月）、一五二、一五七頁。

20）前掲注16）*MEGA*, 1987, Ⅱ /6, S.476,（『資本論』独語第二版 ）。および同1989, Ⅱ /7, S.438,（『資本論』仏語版）。

21）Charles Darwin, *On the Origin of Species. A Facsimile of the First Edition*（1859; Cambridge: Harvard University Press, 1964）, p.489. ここには、自然への還元者、ミミズ（worm）が、生態系の重要な役割を果たす存在として確実に書き込まれているのであるが、日本語圏においては従来、立花銑三郎、開成館（丘浅次郎訳文校訂）、大杉栄、松平道夫、内山賢次いずれもただ濕土の裡に跂ふ所の「蟲」類とだけ訳しており、それが人口に膾炙したいわゆる「ミミズ」であること、その極めて重要な循環的役割が推究できない状態であった。岩波文庫（一九九〇年二月改版）八杉龍一訳は「蠕虫（ぜんちゅう）」、吉岡晶子訳は「地虫」としている。一九八八年に堀大才（堀伸夫の改）訳（槇書店）がはじめて、追って渡辺政隆訳（光文社文庫、二〇〇九年）が「ミミズ」と訳している。

22）近年の優れた農業史、近代化のなかでのそれを見直す研究を展開している藤原辰史は、例えば、「再利用できるようにしてもう一度人間社会に戻す。こうした行為のうち少なからぬものは蔑まれ、差別されてきたが、分解者が人間社会のなかで味わってきた苦しみにちょうど反比例するかのように、収拾・解体・再利用と連なる作業群は、無もしくはマイナスから有を生み出すのみならず、人間の存在様式に深く関わる希有壮大な行為であ」り、「これは、ちょうど、生物の遺体や排泄物を分解し腐植を生み出す昆虫や微生物のはたらきがなければ」ならないのと同じ、と述べている。「屑を拾う人びとなしでは」という外部化の発想、「掃除のおじさん」という匿名化に対しては、全く賛同しえないが、これら従前のシャドーワーク化された労働に広く着目する観点は、これまで、大量生産、大量消費、そして相応の大量「還元」なき廃棄をサイクルとしてきた「近代的」思考のスキーマに対して、重要な変更を誘う意義をもつと思われる。『分解の哲学――腐敗と発酵をめぐる思考』（青土社、二〇一九年六月）一七三－一七四頁。なお付言すれば、身分差別を伴いつつ相対的に優れていた日本での循環の仕組みについて、『資本論』第一巻第二三章第五節 e が視野に入れていたことはあまり知られていない。

Metropolis Reportage on Modern Impoverishment: Charles Dickens, Iwagoro Matsubara, and Darwin's Earthworms

Yoshihiro TSUJI

Because the socially weak are the socially weak, it is difficult for them to gain social recognition. People are not given names (or given names arbitrarily), are exploited, and even their very existence is unrecognized. Charles Dickens, who started as a journalist in London in the nineteenth century, organized struggles using all kinds of linguistic rhetoric to build social awareness of unknown slums. In the sense of a true dialectic, his writing surpasses that of Friedrich Engels as inherently social in nature. This sociality, which attempts to elicit the intrinsic truths of the subject -- and without standing outside the social relationship -- can be seen as a great struggle in the history of thought.

There is another trap in the perception of the modern poor. It is the trap that we are not human without productivity. This also served as the basis for discrimination between the modern proletariat and the lumpen proletariat within the poor. However, the principle of productivity, which pursues only mass production and mass consumption and does not carry out decomposition back to its natural elements at the same time, is warped and unsustainable, and those who are involved in natural systems of production are discriminated against and undervalued. Charles Darwin focused on earthworms, which "produce" fertile soil by "reduction". This is a transvaluation of values that is important for the construction of a new sociality, to resist the destructive power of capitalism which never takes into account the possibility of nature's recovery, and to protect and revaluate the socially vulnerable who are engaged in the work of restoring nature's power.

Keywords : Reportage on Slum Society in London and Tokyo in the Nineteenth Century, Charles Dickens, Iwagoro Matsubara, Reduction to (natural) elements, Metabolic rift of Capitalism